

文庫抄

朝古今文、賀

四十四

特別
14
3163
104(44)



140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4

貴
14
3163
104(4)



新古今和歌集卷第六

三弄

たまひうす秋乃別
秋乃別をとひて
かきあつと神の爲
乃やうくさへま
さりくく葉をす
じすいづまやう
冬やめりまわん
こくにあすそ
病乃垂とうそ
大戴れ日露霧而霧霜
神す月わせうお萼
うこもとくと
うくふらうと
心通夜花落葉
神す月わせうみをのちすそ

了

葛原弓光

月櫻作
詩名堂

とアリテ十二國強を

うこたててもかくあらうがまへ

ありて仏乃る

歌士と源宣之

今を孤是とし独是

名うち川やちせ乃はすさりくせ

とすすむ言志が將

えすうちやすくすくせくらん

孤は孤はよく入

えすゆめの孤と成

えすゆめの孤と成

後冷泉院乃洋時うへ乃の

竹山やとく

えも大井門うすわく紅葉淳

名うち川やとくの陸

えも大井門うすわく紅葉淳

大納言經信

つまわせきりあれより

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

大井門うすわく紅葉淳

涼山の風景といふと

涼山の風景といふと

野川の音と山の音
おきな風と山の風
あやうい流れあれ
はよくやうかとよや
日下れい河と木下
音云ほひゑとよ
歌をうるさきと登
い負だらけりわせへ人もけり日暮くへ入と妻をと冬の負だらけり
うるほ山の風情とまじへすき(山中)林す人へあへて阿(の)とよ
まくとひよへる(音) 漢書高車で越す(音)日も月も山もゆくぬ山里、
星れのきのうかと 日下れい河と木下
歌をうるさきと登
上まれあわせくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
歌をうるさきと登
歌をうるさきと登

歌と 菊原清輔

歌と

あひうどす
否の外山家と
あねか誰と木下
くと自走と
ひと嘗くいは廻と
本のあひうと高と
野川の音と山の音
あやうい流れあれ
はよくやうかとよや
日下れい河と木下
歌をうるさきと登
歌と 菊原清輔

歌と

神はいたる所ある
おふねとあるをあ
あやかすてゆまく
うきよへやくお
音あらうに歌い
おもいを走りす
されどおもひす
ふああをえりと
せふああ葛縄ひと
さうの風情活き
やあや墨葉移り
こりすおもいのう
風情あるや
肩とそれおどれん
やまめあるくわい
うへる
あれは神とりあひと是しきの
山はながやながて比乃山は山と國山と神の
信濃日吉社直充仲女
治平後毛麿下井

七条院太納言高麗書文集

うきよゆくやくの河へ力もとと
ちるうたれむりがつせよやま
うきよへやくお
音あらうに歌い
おもいを走りす
されどおもひす
ふああをえりと
せふああ葛縄ひと
さうの風情活き
やあや墨葉移り
こりすおもいのう
風情あるや
肩とそれおどれん
やまめあるくわい
うへる
あれは神とりあひと是しきの
山はながやながて比乃山は山と國山と神の
信濃日吉社直充仲女
治平後毛麿下井

四三

有原秀祐

山の風情活き
云音あらうに歌い
走れてお逃がと
ありまつくれくゆうひき

そよお義の内山で令林

の比あくこくよめや

きのまくひりあら
四時吟文巻秀疏整

音書云歌体言詠

のまくねまくこねうきりき

六十首寄筆より時

宮内

わくよき秋乃うすやうう山
のまくねまくこねうきりき
のまくねまくこねうきりき
わくよき林落り

かうきれのまくねまく

ちやうりくねまくねまく

野列云勢のうそやとすは御乃字代と云ゆるか等の私内
形えあるようれをすらのうばく年をもじりておほねの邊を
そひるやねみよより是まつまきのト洋とひむくで
されとせけに年裏
うこりとくわう
せきとくす年内
感風とすあふうれ
めを禁あふれど
うあがり
をすうしの年をい筆
わくさひをすの作
ときとす有れ
やかの事はまくす
禁あつたとし筆
禁拍手は清あ江

頬轉卿家年合す爲繁乃々と
葛原齊隆卿後主
が納言後遺子

それとせけいあのそれゆのれを
それとせねとわらへとゆる
それとせねとわらへとゆる
禁と 汗服を裏尚暉師
ときとすはいをとわの神武内
禁とすはいをとわの神武内
あくまくすはいをとわの神武内
あくまくすはいをとわの神武内
はちの玉琴は達也
禁

「門内やとえり
がりとえりを
了りとえりを
月をすりうる
時もの多ひと
三月はてれやまほ
五月とねる狼を
おほきとくとえり
月とねる狼の内
のやう時とて、
まあいあうね神財高
小とくげ神財高の本
すりとまことに北戻
かう月あとのみ
13

「門内やとえり
もけきとあくおこか
「から
あ行法師
月をすりうる
うううううういと川とれり
前大僧正寛忠
牛糞月あく内これうちりて
度ふうかせれととせこゆる
清補卿臣

紫乃戸は入日の新とて

本日は晴天にて
そやく風の音す
らる氣の良也
果乃戸よりのけ
色もゆき成る
れ時ある風ある
やとれほし時も
寫る代時てのち
それねの下敷乃
れ一
扇子を引かれて
扇子を引かれて
神子の月されか
ひまわりの月か
寛平序時后宮乃
御子令す
よ子令す
神子の月されか
ひまわりの月か
寛平序時后宮乃
御子令す

山家晴雨と云ふころと
若原陸儀教居
寛平序時后宮乃
御子令す

中納言兼綱

中務少卿平親

木門一乃やうよ
風風せよけあてね葉
ちりがりとお藉
の用ひうとせと写
りとて被のねだと

中納言兼綱

とあやふせと
とあやふせと
されやうめいすれ
やめふせふせうつ
よ行のまうせとけあ
きとけあせとけあ
よ行の縁は不要と
くとこせハ竹の強
等奏六帖三葉壁
等のあうちと

能國法師

時われあうめがわくとけあ
ときとこせハ竹の強
等奏六帖三葉壁
等のあうちと

近事と清原え浦

万葉寫のあまくへ
あれは禁の下り行うひ
ひてとすかうひをされあすこ
まく常樂の多可社
乃林の下禁の深氣よ
もまや喜びゆきのを
えをうさすまく
えと隠れいぬる
まくとどくまぞ
乃あ小博毛村
西山小弓源のを
あらのす方度よ
少被衣の園中すれ
とよりする第度よ
まじは時をわすれど

多とけみをまつてすとさりと
とくへまかうひをされあすこ
多翁教まく 楊萬寫とすまく
後白河院序
前大僧正益圓

時あと
やよもくれぬ事より神のあらわせ
本乃とれのちよりどくわす
多尋中よ 太上天皇

様ねの傳きらう竹 小豆子より何ういひて
りん やよもくれぬ事乃 まくとくれ乃かよもれ神
野引えやよせよと ひき 人磨
内もとよひける まくれ乃あまくへ これの林のそ
ひもととみじわ ひくのひのくとおほり野へとせり
ありう神乃あせ まあとめうちうりを傳きとみじわ野へとせり
み國乃うじううをりう
少すりうりうい 玄音云布田神社本多宗とあひゆくと
少すとねとめうとめうとねとうらへとねすとすうとくはれ
あれのゆくとめうとめうとねとうらへとねすとすうとくはれ
みをやせんとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
され乃あまくへ 野引えをすまくとひとひとひとひとひと

せうのやうかへかひにかせあむとくまうばうひ
ねくとよむと

せりゆすれす

和泉式部

野引されよとくとく
路と經のまのまほ

めりしやとせども

じとよきはれとと

ゆれねいゆるゆ

ひかると月のせう

やうゆくことよか

墨素毛(くろそめ)いざ

手や指(てさ)とま

一猪(いのし)せおれと

ゆうしうれあうが

けとあるとぼ

枯(か)えやどゆの里(さと)

百首弄

二魚院(にぎょいん)勝波

わらふみほ(わらふみほ)かくはるの

袖(そで)をひくのりくもくれ

狂(きょう)三(さん)と あ行(あぎょう)法師

けとあるとぼ

かえ

道因法師

時事乃國(ときじ)ようち浦(うら)
みえ乃(みえの)すらはる

に浦(うら)ゆく地(ぢ)

きれどわらはれ

あひ(あひ)みすと

竹(たけ)やかひ(かひ)まや

竹簾(たけらん)太(おお)平(へい)洋(よう)

伊(い)豆(う)の嶽(だけ)河(かわ)

あひ(あひ)すと

空(そら)の篠(しの)竹(たけ)

れく(れく)りゆ(ゆ)

降(ふ)と方(かた)とく(とく)時(とき)雨(あめ)

に海(うみ)の古(い)年(とし)と時(とき)年の國(くに)

やう(やう)又(また)か(か)まふ 宝(たから)藏(くら)い(い)まのを(を)時(とき)う(う)

千五百番舟合(よめあ)

深(ふか)奥(おく)親(おやし)

左(さ)東(とう)史(し)郎(ろう)光(みつ)子(こ)

いまと(いまと)すち(すち)いも(いも)ふ(ふ)す(す)れ(れ)郎(ろう)

ひと(ひと)す(す)り(り)く(く)度(ど)す(す)り(り)く(く)

いまと(いまと)す(す)り(り)く(く)度(ど)す(す)り(り)く(く)

いまと(いまと)す(す)り(り)く(く)度(ど)す(す)り(り)く(く)

いまと(いまと)す(す)り(り)く(く)度(ど)す(す)り(り)く(く)

かえ

すゆく庄乃松風に宿すやうやうむを國のやや言ふ本
をあらむりといふのにすしよちねわ乃松風もむなはま
ふとあるとこすすむやうやうやう

トのよしむか

後高僧

心のよしむか後高僧自
僅の奇才くみせの
あるやううううう

トのよしむか
すくよれまひうらもくれひ

もくよしむか

トのよしむかと長

歌のよしむか

やうきりやうすあ

ま木乃庭に草木

うう作とみ葉原

くおつねある

きりうすうと

百首毎日一時入道左店
あせた乃やよはめれまひよす
ふをかやよくちよせれまひよ

二条院彌波

トのよしむか

言諸國乃ニ嘉氣と云ふ事一ニナニモ有れ。其事はすま

き石の事。

みをかをひめに

みをかをひめに

月の夜の月の夜の

うゆるんばれ

ひみがくわく

めぐらしのま

歌

源泰光

病にりうかれ うりあひ乃力
和算ふるく 六首尋やまとくよ
冬月 茅原家隆胡居

ありわはりうしし神は是くも
阿久りうしし神は是くも

國の枯れうきと思
仰はる事ある神
とたまき新い事
うきとあはる事
うきの孤すて船
ほきのぬううと
露より川の船
己被はされと

あらはりうしし神は是くも
野引ふるうし神は是くも
情乃社れ彦じはるやう月新の萬歳のそと
主をとくうし神は是くもとすりきのれ時めの壁に立つて
寒風に吹き立つて月又神の風のうら立つて
神は是くもとよめり

奇乃立あ物と
一ノ浦へ立つて
おひかのうきとあはる事乃ひま

中務式典平親王

みをかをひめに 月にこもひまうで
みをかをひめに 本乃をひくして月や出

春日社尋食は曉月とよど
石馬橋通興

宜秋門院母恵

みをかをひめに のちれは根ち
本乃をひくして月や出

春日社尋食は曉月とよど
石馬橋通興

みをかをひめに 本乃をひくして月や出

春日社尋食は曉月とよど
石馬橋通興

時にはあつてし

まへるのやうに

月を待とす

千五百萬寄合了

源興親

今よりは本の家に
木の葉と厚い月の
落葉のほんざら
なるよきとすみゆき

さりうのうかなる者

乃くとも新を即よ
山のせきと比肩の
もとへ時早うて氣
の却かきかなむる
じの世間とまや

それへゆる新を即よ
あくまでちゆうじわとれ
五十首寄合了

寛喜院

五六十

あれがよしと紙
云々お詫びせし
うとよ思ひ方

月の生詮よ一の
中ともててとせば
やうへとされにまき
まきりとめゆる

今ハムカナタ一地を付のたる
うとめやへとすめのたる

寫ねる肉よねほ
ぬをねくあはれ

月のあはれなを
あはまやねとす

あはれよと
月アマタリ

意をあらまよひかねてきのよ
月アマタリとす
神え、ありね
まよ

良運法師

思の國は是す被のわーと

大僧正益家

みやくいをのうる
みやくいをのうる

みやくいをのうる
みやくいをのうる

あ行法師

きとやく事業
きとよもさり

とくやま農乃里よりおちられへ
枝行月をアラシル那

音云みをれど
おほひねふ

五十首すより時

右原雅經

枯の木とつじ葉
玄旨云下界の枯の
木を拂ひ手て

秋乃木をつじ葉てやくすの
月のかづくイナフのうせ

今ハ上乃月未代

狂言と　式子回教

桂を吹本種て煙
風をすすめゆきれどよもぐ

のよくすのきを庭乃方うけ
て月の草をきと風

殿宮院大師

我門乃の里の草につと跡乃
跡のすと床の草も

とく行くとあるみのと月

森原清輔院

多枯乃森の枯葉
跡行云はあをそ
あはとく多枯葉

おちてる月乃うけのまやげを
空月遊あやげとつひつかれと舞葉あらき

水晶を陽曆乃蓋のよよアラヤシシミトサセキ桂ノ月
入リ此月ニハ何事す彦岐の上ニ持セリモアシテ新の事す
ニ移カシム事也。雷轟既降木葉盡脱人影在地仰見明月。左は
さわじくともれれ
さわじくともれれ

千五百首の詩合

宝大慶文太史後咸安

憲

の事也。月ニシテ
それハ雲はきどれる
明の相アシテナリ
トモミル様模子也
實もヨリ神の事也
云旨云打モテハ
心安くやれぬ
トテリ實ハ甚と打
ソケテモわれね
裏ヒシテ神乃切アキラケテ
ねぬお化月乃新アシヒケキ
五十首序をとく一寸

右湯門營通具

裏ヒシテ神乃切アキラケテ
ヤケキイ
ねぬお化月乃新アシヒケキ

藤原雅経

育レヒヤアテ
了ニキテねぬの事
トナリ片巻と復切
新とめ、病乃やうをまひゆ
度ナリ病とまあさう乃月
度ナリの事は勝トテ
月とゆめと秋乃
度ナリ月ニれハ秋乃
度ナリ秋とあす
月とむかへとの事
モ病の事とまひき
いてあらるどとまひ
ハタキ乃神をや素
被割アシテアシテ
年ニ病カシウモれぬまヒ御をまん拂姫ハアシテ神を拂
かせたてアシテ、まくまくねくカシマトモハシカシテ

清音清

成因

ハタキ乃神をや素
被割アシテアシテ
年ニ病カシウモれぬまヒ御をまん拂姫ハアシテ神を拂
かせたてアシテ、まくまくねくカシマトモハシカシテ

まうり乃萩のゆゑ

卷之三

野
江乃芦をやうとせり
あやめ萩のみゆみ
れやまか立く
じゆくわらわら

あまば身の國をも
れそよきを教ふ事

蘇原道信題記

うかがひて
ぢやうめのえひやま
うじよかの葉

トモハシテアリ。トモハシテアリ。トモハシテアリ。

近頃は暮れ方
の音がこの辺乃

多上天官

秀は松遺をも重ん也
下山へて、三月八日
明永の寺、
日

あうすいかれよも乃あ
よ

唐高宗皇帝
深喜不置卷
太子

百首哥也

鶴之子乃山翁

指政大政大臣

鶯の聲不鳴詩
すり李嬌露

内乃之公卿也其子也而以爲
之弟也其弟也

詩曰：夜饗千金。
鶴子化爲鶴，事文類
自露矣。充於草桑，

聚乃刀作九周處風土記白鶴性好
上滴水有色即鳴之元人有口詩

自第十六卷起至二十卷止
卷之二十一

くらわよ感にあり
乃のとくとき
ノク

と竹のとどりくあうふれりかうめ
雨よ曉うへせんくらむ博多

自了活潑不字
一束子傳之西

うかく、おれはおまえのことを思ふ。おまえのことを思ふ
おまえのことを思ふ。おまえのことを思ふ。おまえのことを思ふ。

乃乃之之也也

人丸の源氏もまたやうやく氣をうつて

身のまゝの風情

崇徳院御時百首歌をつとひふ

着原清楠題

そり人の我の聲
身年、身と、独やねえ
別きぬれいとう
て君、子すの独やね
じと傳す風情を
おと定家郷近代
お哥乃内よお連む
あれいうても

野引云狹葉あよ
引ぬき草乃原もわれもとれよとくやーるの處
草の多くは枯ぬまの秋のころがそれとれよ向すーとようり墨葉狹衣
と死を身乃女君とゆきうらうむれ歌があるとてうハ秋の
うわとさん草、その野原もおれよとれよと向りん。つるぎ草木

身のまゝの風情

秋のあうりを
れうとくやー秋のあうりを

百首哥中少 前大僧正慈圓

おさむる山田の弓
自弓弓或ね云山田
利黒ておまぢかの時
乃翁不祐^{ナカニ}了彦乃
一村かわる林をあ
翠やうよ細めひよ
絆と林とせむるあ
まほらよこらひゆ
野引云さらひひく
とみやくをかどりく^トとほく夕の弓を林に引ひく
乃上よばくの白露の弓とやくに今ハ弓を下をうの弓とひよ
をくとやくの弓とひよとばく一括要とよやくと
そよ房結而成る
こじふらう

中納言家持

かのとくにわせむ鷺
仰詠冬浦月を望み深
おまなわせは嘆き也
辛うへやすすまむも
弟鶴の脇アヒシ君
白く垂れゆるる
えふ下界とも思ひ
天のゆうと鳥鶴の
鷺やうとせひう
アトミサセミノ寒露
御つゆりつむしりそ風の力アハ那のゆりのえもは風の氣をより
天をとむりすアムサ事持の哥ドリシムヤニ秋云をほく月
しきくやす時も。たまは天よ浦くさんくの源をすらじふむき
げあをほくく國情つまゆうすと鳥鶴鷺のり拾ひておも
うれほくわれゆく。までの御元ハ被る比翁萬のく事は向る。ま

う乃がのとくも鷺あわせやアトモ
クモはゆく。延喜丙午
さればくかれゆくのアハだされど
まわらすとくのアハ
雲乃ナキアリテアホウムツカス

第宴 鳥と當主を
抱寝うめまし尚侍
ゆふうがいやすり
通商をまよひや
きくのれへあひて、
初おのまきうこ
うへがくとぞき玉
「アタマシタモ」
つうえれあきれこ
新すと今ハと鳥の
是則隼ハ鳥のむひ
おアシムとゆぢて
今ハと鳥のむひれ
うりがくつひと
のアタレハがくまつひとのゆひま

延喜十四年 尚侍在原はすと鳥高治
とせんの時 中納言兼捕 朝臣
日 墓上是則 夜半後
延喜丙午

のアレハカシムのとみ

ハリハリキツキ一聲後

万葉十石の内屋代

のとものテモ今又

にうすねをあらん寒

草ハ寒の名ふわす

品をりゆよ

參十射の節乃尾乃すかまく乃一古尾乃ちや一アミ
花も空寒いが臘乃たの寒枯すあれと云とつり愚案是密勘是愚
花のむ乃あふもの家被自齋す所云ば春乃えうす乃ての
そし叶を冬枯れ比向く風うゆううけでうす
やれ春と、世の半丸國力、まことに秋也。一中道又野引云有
心休きくはのまと、雖ほこゝんちらくあふといづをアマシニ
少々、苦乃壁れ角く手をくみやううもし枯葉す成るハ一臘の
ひまどうり苦のまことをゆいて万事とぞいふ。愚案は

をゆくをゆくをゆくをゆくをゆく

あ行法師

け乃ふのあふれまもまくす

うのやれをうの風わてもうす

參十射の節乃尾乃すかまく乃一古尾乃ちや一アミ
花も空寒いが臘乃たの寒枯すあれと云とつり愚案是密勘是愚
花のむ乃あふもの家被自齋す所云ば春乃えうす乃ての
そし叶を冬枯れ比向く風うゆううけでうす
やれ春と、世の半丸國力、まことに秋也。一中道又野引云有
心休きくはのまと、雖ほこゝんちらくあふといづをアマシニ
少々、苦乃壁れ角く手をくみやううもし枯葉す成るハ一臘の
ひまどうり苦のまことをゆいて万事とぞいふ。愚案は

奇恵はのまハヒヨウスル乃テアヒトシ付ハ我直ニ傳原

崇徳院四十首奇ニナリ

大納言成通大翁言宣通
全集卷之二

玄秋のままとあ
一草乃と冬枯
葉がくすま
村一草ノキ
木をモナラぬけ乃シ
狂言と
あ行法師

モアモアヒテ
園居萬物のま
アモアモー園寂
トモ博く萬物
君にマモ動さね
アモアモ
盧齋主母

人重テ
人少テ
うつまく行ふのを喜び立力今
も祐う山居の樂
乃時とくに安
とせんか多き事
を弄

序

百首奇詩
卷之三

うちねり山のすゝみ葉二丈ほすすき山乃山に晴れたりと
年一うちねれぬ山のすくよどみする相手を用ひて木の下紫
色毬球を立めき山のすすむやまくまくとこそすむちまの
ひき
ひきと 室大廊アマニイ大吏儀成
門あらうづくま
寄りふしそうとく家
門こうりうづくまの山川乃
鷺スズクナ仍シテとくの山や
滻水凍ツブリ明流不得タラフ
白雲天の鏡カミツル且シテめ
且シテゆかくは生麻
すまちふ曉ヒカルの川も
のしきふとあるもせ
まくら方カタ思ひますよ
まくらうりハ泡ソバの泡ソバ
おひつまくまく
ひきね身ヒトと立タムる
まくらうりと袖タブの腰ヒダ
ゆく

新古今集抄

五十首序をより一時

の危の危あすけり
うわるどあると
ちみきよは
れゆく神よほて
そあせねまき
にれよ神よ因の
おひじよく美
いひよよきふた先のめいまくにとくよくと
きりくよくとくよくとくよくとくよくとく
きのよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
かくのよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
やくよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
下署野列ニサシムシタリシレトテケモスル事
新古今集抄

宿務四天王院

ノ

川

モ

モ

モ

モ

モ

モ

モ

モ

モ

モ

モ

宿務四天王院乃唐子う字瀬川

とく

太上天皇

前大僧正益圓

物の事よしてねやうされよさらねまひまよてくよ
うううううううううううううう
ひおなうううう
新古今集抄

夏暑哥中よ　武子内歌

人丸のあやま
うち川の細代すま

アラヤマニキハマムクナリガタカタ

ことよほのひあぢす

せけうじもつまつよほ

あへとよふきし移振の

車のあひ道

見ゆまにそひまわ

ひのねよ

おまめのうやまわ

野引云さよまに

行やおもしきまち

ゆあうの瀬はまで

せと、汀うちおど

とりて遠まく波

にきやう月を云

ひくわくとむかのゆ

池のむすしものや

一言に乃りすまうすこりり

移振太政大臣家并金子棚上を月

藤原室隱胡臣

おまめのうやまわ

こりりそいつるりあけ乃内

もえはれとふ十首并

よすせは

りくまよ

皇太后主大丈優成

じとくわくたの池乃もうすし月乃

やつゝ神

うづわねるうづわるう

紅ふ翁

山毛赤人

て神すううとおぞ

おの感よ博さる神の感

とおほの上よ月のう

つまよさくま

うとひ乃おみゆけ

裏葉せばら原たま

うとひおの義顕

ほおのふまゆ

おもゆゆく感情で

えされはお風

野引云年のがり

竹久

鶴園法師

タされはお不^レウセ^レテテテのくら

うちかくあすり^レク^レの時^レス

竹久

鶴園法師

也野田玉川海ア所さる也後下れ夕風すみきりての夕絃
とまのすにソひがせりあを上れおもわらしも一神ノ御林をまよる間
うるをさる骨髓コラゲルアシテモカサムン所海アキタヒトモカサム
先輩アされど

五音ノ事と重之

五音ナリとねち
上ちハ左今向すまな
うちがア無處アヒツ
れ河内海アシテ
風情移アキタヒ
トヨ奈蛇ヨナヘビモカサム
よめの天がの事也のホ
カサムア
シテキミトモア御
久乃は風アシテ
海上ナニカサム

後徳寺左大臣

ゆあきよこわくもむきほやドウ
アキムニシテア乃モアサマシエ
極院より百首舟アシテ
祐子内教主家記伴

乃小夢の事より消
眼あ乃京ニ隣すま
アキムニ小河古意
アシテキモ終止の際
風は吹上とテ
シ紀伊の事アキム
に飛立キ多の時
ハ浦川吹て波立
クシテ

持政太政大臣

月アヌシヒシヒアヒテヨヤアヒシ
カキナケアキモヒシカズア
ヌヌ百萬ア合ア
野列云波クハキト
アヌ月吹アヒテ
カヌ風景アキム
に車向キアタス

正三位季能

ひきておきひとりうらんとよやりあつるる

せじづらひりこみゆく、まことちくあむとうて(晴海はの庵)

月の入音やくわかくまく

風すかにようじゆく

音首云かくさひとほ

をよせあ風すか

まくゆゑよもよ

まくはなはよと

よやり片叶の葉

葉と片葉のふ

面巾粉骨の墨

まくにあむとほわ

うかの月のえ葉

浦今夜の袖

くゆ立風桂の葉

かきくふ 畠原秀能

風すかによすにあす千乃かこひ

おゆくねほりちくちくりり

おあくふ 橋中納言通光

うひと乃風と夕音のあくす

いたす神あわちどりあくあく

文治六年女御入内屏風

正三位季政左美支那

子

風すかのよすにあす千乃ひくちく

いもくゆくは乃こまくさりきと

五十首詩をむら一時

畠原雅経

えりやくとく

ゆくよねをとく

六季のあうき傳

すくそけりくとく

移くわくともとく

きくとくとくとく

しきくとくとくとく

あとうりをわものうまくねうまく

河内

あさのやひ乃うきな

はゆのまくらこか

おねく野の下やと

うねうとを

うのあらうとれい

野列云川流ハみよ

そすてぬあるふを

うお野野らゝすり

てやまの川も中よ

岡も下と野の居

すがまつてゆき

山は下へは屋を

わのうよせね

お高柏の妻のま

さうせけめ明枝

ほ乃まくらく、いくと、おん

おまく

湯原玉

湯原玉

湯原玉

湯原玉

よのあらまほ乃川れんとよ

かとうちーあくやまかか

人磨

先田乃野よしきちつらばくあうち

いわゆると

キわれゆと雪とひくうけ

かみゆると雪とひくうけ

雪乃行くと雪後りとくやま

先田乃野よしきちつらばくあうち

いわゆると雪とひくうけ

キわれゆと雪とひくうけ

かみゆると雪とひくうけ

雪乃行くと雪後りとくやま

ワ侍

瞻西上人

ほねやりあひのむかひうつと

うひやとこすい初雪やつ

かみゆると雪とひくうけ

雪乃行くと雪後りとくやま

かみゆると雪とひくうけ

雪乃行くと雪後りとくやま

五

萩原基後

かみゆると雪とひくうけ

雪乃行くと雪後りとくやま

さうめいがをとあ

るやくとあゆ

さうめいがをとあ

るやくとあゆ

久六放^{エホ}ア^{マハ}通^{マハ}隊

キ乃^{アマハ}ア^{マハ}キ^{アマハ}ト^{アマハ}ト^{アマハ}ト^{アマハ}

人^{アマハ}シ^{アマハ}ミ^{アマハ}ニ^{アマハ}シ^{アマハ}シ^{アマハ}シ^{アマハ}

接^{アマハ}中^{アマハ}相^{アマハ}業^{アマハ}事^{アマハ}方^{アマハ}

ア

其^{アマハ}の^{アマハ}隊^{アマハ}は^{アマハ}山^{アマハ}に^{アマハ}る
ら^{アマハ}と^{アマハ}は^{アマハ}り^{アマハ}ん^{アマハ}と^{アマハ}、
幼^{アマハ}童^{アマハ}乃^{アマハ}ト^{アマハ}も^{アマハ}れ^{アマハ}御^{アマハ}秋^{アマハ}
百^{アマハ}葉^{アマハ}七^{アマハ}石^{アマハ}上^{アマハ}す^{アマハ}れ^{アマハ}き
男^{アマハ}乃^{アマハ}秀^{アマハ}士^{アマハ}も^{アマハ}と^{アマハ}き^{アマハ}ふ
主^{アマハ}ト^{アマハ}よ^{アマハ}ち^{アマハ}つ^{アマハ}す^{アマハ}ん^{アマハ}島^{アマハ}
山^{アマハ}野^{アマハ}と^{アマハ}ト^{アマハ}ち^{アマハ}う^{アマハ}御^{アマハ}
ち^{アマハ}る^{アマハ}野^{アマハ}ト^{アマハ}雪^{アマハ}の^{アマハ}下^{アマハ}
國^{アマハ}く^{アマハ}を^{アマハ}我^{アマハ}く^{アマハ}と^{アマハ}
主^{アマハ}六^{アマハ}四^{アマハ}九^{アマハ}二^{アマハ}八^{アマハ}一^{アマハ}五^{アマハ}三^{アマハ}
野^{アマハ}列^{アマハ}五^{アマハ}四^{アマハ}三^{アマハ}二^{アマハ}一^{アマハ}九^{アマハ}
と^{アマハ}つ^{アマハ}雪^{アマハ}ノ^{アマハ}せ^{アマハ}ト^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}ま^{アマハ}あ^{アマハ}る^{アマハ}世^{アマハ}を^{アマハ}と^{アマハ}て^{アマハ}雪^{アマハ}、^{アマハ}落^{アマハ}積^{アマハ}す^{アマハ}と^{アマハ}
せ^{アマハ}ま^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}れ^{アマハ}す^{アマハ}の^{アマハ}寒^{アマハ}の^{アマハ}は^{アマハ}暖^{アマハ}か^{アマハ}し^{アマハ}て^{アマハ}人^{アマハ}、^{アマハ}墨^{アマハ}葉^{アマハ}草^{アマハ}て^{アマハ}座^{アマハ}

往^{アマハ}く^{アマハ}日^{アマハ} 紫^{アマハ}式^{アマハ}部^{アマハ}

主^{アマハ}六^{アマハ}四^{アマハ}九^{アマハ}二^{アマハ}八^{アマハ}一^{アマハ}五^{アマハ}三^{アマハ}
野^{アマハ}列^{アマハ}五^{アマハ}四^{アマハ}三^{アマハ}二^{アマハ}一^{アマハ}九^{アマハ}
と^{アマハ}つ^{アマハ}雪^{アマハ}ノ^{アマハ}せ^{アマハ}ト^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}ま^{アマハ}あ^{アマハ}る^{アマハ}世^{アマハ}を^{アマハ}と^{アマハ}て^{アマハ}雪^{アマハ}、^{アマハ}落^{アマハ}積^{アマハ}す^{アマハ}と^{アマハ}
せ^{アマハ}ま^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}う^{アマハ}き^{アマハ}れ^{アマハ}す^{アマハ}の^{アマハ}寒^{アマハ}の^{アマハ}は^{アマハ}暖^{アマハ}か^{アマハ}し^{アマハ}て^{アマハ}人^{アマハ}、^{アマハ}墨^{アマハ}葉^{アマハ}草^{アマハ}て^{アマハ}座^{アマハ}

主^{アマハ}六^{アマハ}四^{アマハ}九^{アマハ}二^{アマハ}八^{アマハ}一^{アマハ}五^{アマハ}三^{アマハ}
主^{アマハ}六^{アマハ}四^{アマハ}九^{アマハ}二^{アマハ}八^{アマハ}一^{アマハ}五^{アマハ}三^{アマハ}
百^{アマハ}首^{アマハ}奇^{アマハ}よ

あ行法師

日とて雪風す
故ふ炭を燃て暖む
乃用さると雪け
身もまつともう火焚
暖めゆきとお風の
里にれまいとこ
ある流りゆるを尋ぶ
言旨云あけうと
自然へ我はうとあ
こそねまうとあ
事にうなうとあ
ぬ原ふ年の事ゆ
き度り墨葉人をと
よみよ向と絶体と
おうてはあゆうとあ

上あ門院共衛

かわくい風まつせとううと
れゆうとあゆうと
雪とすりゆうとあゆうと
皇大内官大丈後成安

ゆ年之とてうとてうとゆ人をとてうとゆ
てへ御身はまうとてうとゆ人をとてうとゆ
「トキゆくせの年をゆくせの年をとてうとゆ
き」うけくよらをとてうとゆ「トキゆくせの年をゆくの本乃付も雪の晴
うとゆに古事記年の事トゆのゆからりて岸にえとゆき
萬葉歌うとゆい含めうとゆき

大納言隆季

書云タれい年
とてうとてうと
「トキゆくせの年をゆく
ひまゆくゆくは春
のゆからりてゆく
墨葉史記九種傳
日全一世間如白駒
過隙耳注白駒謂

後法師

日全一世間如白駒

事あて雪と
 タタキノ君りやま
 おのれのきよさゆ
 さんとおゆくと
 まくまくと
 りゆくと
 まくまくと
 雪タカモと
 ハシテスミンの庭
 ワニヨレバヒンと
 にめあるとハナう
 オクねハキヒツレ
 ハタキタカクと
 おのゆ年ゆの寫
 悶見集年下れは下
 の自山をなづり
 雪乃けり後徳大寺方大臣の事
 おはうりく。皇太后宣文後院
 おこへる。おこへる。おこへる。おこへる。おこへる。おこへる。
 イツアシノ君とやうとまくまく
 オトシムシあてて庄内雪と
 あ
 後徳大寺方大臣

刑部の莊兼

東深田雪とりすと

く乃キの雪つよつ
 そとのがとて白山
 年す。雪と積みて
 心も素よ衣のとゆ
 ふりとよしの雪
 やんと
 あけやねねさくめ
 嘘固ううやくを
 瞑やうそをねまを
 さくと山のやく
 あやい店頭の暮
 山は山の月に満ち
 て月は夜がけり
 駒すすす雪と夜
 乃ゆととととと

高倉院所再

すとと山のやくすととす。白雪と
 ひげねとぬくとくわらとととと
 みやのちわからくととく(ぶ初官のと

絶の先とて野
王の曉の曉のを
あやせまう

山里はなよもと
より年をとれ
ゆと雪とそれ
ハ冬わすとけ
せど

かきくけりとくとく上東門院
アサリの如月に山里
在原宣長

藤原國房

さひーらむかせーとくとく
あいのむすめたり雪のふる
百首をまつて在原宣長

おとて野云重の こやとめく社うちとよゆくも
月の歌ようぐんは あわわわらぬ雪のよぐれ
うじやと葉橋のえ おほは降すめしゑ
や雲ふ野亭とよぐ
わよく困窮のむ
こよとめく神うらよ
家祇云葉うらを あり人乃よもよわるてよん
はくすありよひき 朝霞乃朝ノ雪をよのむ
あわよもよ家と
ひくにとくとく神をくわく神うらよと雪
せよりよりよを本哥とねる哥乃本とくわく神うら
うす葉のちせひなくたはくまう野列花四度佐野辰太郎
あん乃舞のた野列云侍人乃よもよのむと古乃者山居の雪
せふあわせよほ雪の下りまくらしき野端の松の雪

うちほりすとくらべてあこぼすればと見ておきまらす

蜀家もほ京

松原やくわく

のうとさうて

採れとあくられ

あるとさうとく

草木の生えよね

早ね索引を詰

ゑふ雪やれの竹乃

かふ月と差れの夏

かふ月と詰年を

是行のうすとく

て伏とすと篠原や

す雪よとすの鶴

雪せよと蘿をとき

草がふとまくとねくれ竹乃

かみ乃とすの雪りよとむき

かみ乃とすの雪りよとむき

かみ乃とすの雪りよとむき

かみ乃とすの雪りよとむき

私共とも あん

あいのうじうちゆくれはるよ

垣窓漏は隣奥

うのすねう雪ひづけ

あいのうじうちゆくれはるよ

垣窓漏は隣奥

うのすねう雪ひづけ

あいのうじうちゆくれはるよ

あいのうじうちゆくれはるよ

入道前園白太政大臣

すす雪くとまくゆすりがまく
さひへとけよとけよとけよ

若原有寡翁后

草がふとまくとねくれ竹乃

かみ乃とすの雪りよとむき

雪の子やすりぬけ

豪喜沖時再びされとほくを一け

はき書之集第三内裏

生ハ

紀貫之

清屏風乃舟せら音

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

ル

の角へ山里すむしの

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

皇太后宣大変後成

奇ひ山里の雪のこ

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

ル

すよやすり我と

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

ル

ふおやすり我と

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

まわすゆきとあら

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

よおー山里人よ感て

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

まわすゆきとあら

雪の子やすりぬけとばやかくやまかとよ

ル

守覺法親とお十首再びさせ作

曾孫好思

物をもてまつてまづね人方雪をわたくはとす
萬に於くと見人方龍りよきの枝もそと萬てんり又說
葦乃雪かいかへるをさんとひよやくやうよおまくゆる人
こうといらでまき入ハシレとどりに乃づきあし署

万葉集卷之五
不才原乃風

東光法師奈良三寂
寒光法師一空

雪乃河ふる原ゆきすすめ物り
於よをきし山里され
ひ雪中の名も
あす今何され
れぞアツマテれ
けいはなみせす祭
秋の葉々の物り祭
けりす小物の毛
あくれども中省
あれハ松の雪すうふ
百首歌中太上天皇
」にねまく石かけ儀の今何
いへしはれ庭乃士ノ御
けうい花と云せし松
けうい花と云せし松乃士ノ雪

千五百萬奇念右湯門舊通異
千五百萬奇念右湯門舊通異
者をもすもすく人
は昇度經道判詞
重門梅乃花れす
云古年花の子す
とつうすり劇門花れ山へをなれど、ひまれ結句とむかひ
墨竇古今下を吹すれひがのうすむことあへ雪すたは家ふうと
雪夜よい事すりすり色少すすまサセ分明すむ雪すこすりて春と移
梅の花はれく身を一派雪ハシブすりすりはとく跡を只雪すと見遣
ナウリする交節のみよ
交節は拂暖乃あれ
禁評されは隨筆す
くみみとよめを
タリ春の事す
食せぬきのうす
りよはまくとくとくとくとく

崇徳院詩序

忠通承永元三年四月廿八日住内大臣

内大臣御宿所候の時家承令

法華傳道前園宣太政院

御宿所候の時家承令

御宿所候の時家承令

京極園白前太政大臣陽院再会

ちゆ納言達房

了

う生あるう事と
御宿所候の時家承令
うあら原にまの里
野原へはりて木乃
室(室)野ふ食せんを
室(室)野をああく
ああくすと草と
し樹(樹)て草と
しの根(根)と
すの野(野)と
けすが降(降)せ
限(限)て雪(雪)
限(限)て雪(雪)
限(限)て雪(雪)
限(限)て雪(雪)

左近中将公衡

行大

北九

がすうつみ
かみくらふみとお紫(紫)
うと猪(猪)年(年)わらと
あらうとととと
ほの川(川)原(原)月をゑるむ
理(理)ひをよすゆる

推僧正承継

中(中)にゆくはれを
身(身)とせゆうて
座(座)のあくくま
理(理)ひをよすゆる
あらんむにせんた
黒(黒)せてもしも
せとせとせとせと
ハ浦(浦)せとせと
月(月)せとせとせ

案(案)事(事)人にほりて

日をとて雪風す

あ行法師

故は炭を極て是を

あひてはいと與をとて人やま

乃用とすと雪け
身もとそり極は

やすくがく年乃それね

駆ゆめかねと身の
墨ひれさりとし

あ流うるぬ等よ

云旨云あひうり
自がん我はうり

そねむらあむもと
車にそねうもと

ぬ原ふ年の事ゆ
き居り墨東人をと

そねむ向と猶体せ
かひてはあひうり

至大臣大丈後成女

かわくは氣よ二物とよりう

れゆくとあるとよし

上あ門院共衛

かわくは氣よ二物とよりう

れゆくとあるとよし

上あ門院共衛

ゆ年をとてうりとゆ人をとてうひ事ゆとようとよやり年の事ゆ
ては御事よとてねうおゆといおうとれゆ年をとてうひ事ゆと
トキゆくせの年事よとてねうれ雪うらす比が年とわとくの御世の事ゆ
きりつけくようとく年月トキゆくせの事ゆの本乃付も雪の事
ゆとくに正事す年の事ゆの事ゆからりとてだがせんとてき
事ゆ國うくとく倉めーと寄りくと

大納言隆季

書旨云タれい字
とくねと古い字と
いゆよやくとく
ひまゆくとく
ひまゆくとく
信感と寄り十首寄と年侍
クムは業事のこうりと

墨案史記九輶翁傳

日全一世間如白駒

過隙耳注自駒謂日

後あ行法師

影ヲともすへひるま

そしめのあらは

いと新年の我身

みねうひーとを駒ハシ

あせれまこと後

くすこばへとくよ

駒駒ハシハシの連

性セイかへーと

ぬこりよ寄年ハシ

そひのあり終ハシカタ

牛ウシを立ヒキて

あけまほへーとひきぬ處カタの令

へけのとうりとやむいゆか

百首詩ハツシ時ヨシ小侍從

扶政太政大臣

うなうすゆのとくとく

おひきのとくとく

准律卿陸程

うなうすゆのとくとく

おひきのとくとく

おひきのとくとく

おひきのとくとく

おひきのとくとく

おひきのとくとく

は世の事へ入れまい
シテ年事不凡夫代
路のよきは先代を
阿波の事と教せぬ
四半世年相とばはま
いと離れて事ある間
ハシモトは事わざや
ほりのあひゆゑ
おととくは伝と
れ用井年事
せて我おもせます
くさくううむ
あれねうの事う
えりとまをれま
めとまはおもす
りしよけり
百首平時 入道古大臣
うれぬう内事ううれま
じうはまうにまう一まう
う内事う易内をわゆうと歌
まくよけり
がまきて年方のうりあわううり
きわむとうりかうきひま

和泉式部

入道お國百首尋よみせ候る時
嘗てされどよまくにうるる
後徳寺左大臣

あく國百首の事
ふしがとせれ是を
かず一年のめり
年のかかるるを
よきいとわくそ
えすとせれ等と
石もれとけせり川れあすま
そやくもとーのそれなりるる
太浦門内大臣寧らく海をせま
事といつて心とよる

有原家胡居

ゆくとくりされ
吉首行年難鴻
いわゆく神は波やくらん
ハおじよ書て

寂蓮清師

神よハセ乃は事
セシカニシテハモ秋
くゆリセ御ツキ セナリアシテムテテ
あせ墨葉御まはき トムトシヤムサムの木山
ハナテトモト

セナリキセトタ

千五百番寄合

皇太麻宮大史後減

野列云重葉君

タマシテ行ツクセ
わらひ木葉松山

清江さんと

タマシテ行ツクセ
も今ハ萬どりか

けく我シギハ波城ねりとすけく

生シホリやがむち 年乃苦シホモ身の年力タクシヌキ
新テテリセテ詔セシムドヒトノ御年セガシツキトセラウツテ
スルヒヨリ事シテムテムトキ 身經判切ミトセ高謀小氣シテ

日本紀生と即く仁徳天皇の
年ニ月小樓のわたりて墨を御免とす。民にれり、おう乃
煙也。もくさうれ。今よりのちことせり。是とやどり。せりい
内裏乃御使也。もくさうれ。今よりのちことせり。是とやどり。せりい
のありて。是と。に民かす。す。ゆき。す。ゆき。す。ゆき。
て。は。お。と。よ。う。を。す。ゆき。す。ゆき。す。ゆき。す。ゆき。す。ゆき。
乃第冥乃子こ。女。金。仲。姫。う。冬。角。の。年。山。正。月。己。卯。日。
位。う。は。う。を。ま。山。廿。四。世。を。う。り。ア。ハ。七。年。シ。テ。吉。お。高。
え。年。屋。の。り。カ。テ。跡。列。ア。ア。屋。ハ。福。國。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
隆。治。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
あ。あ。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
代。カ。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
神。も。乃。内。ね。の。は。算。方。華。大。天。平。寶。字。二。年。春。正。月。三。日。召。侍。從。
皇子王臣等。全侍於内裏之東屋。直下。即賜玉帛。肆。宴。于。時。内。相。藤。原。朝。

新古今和歌集卷第七

賀辭

子供も。物。い。され。ふ。と。め。

と。御。治。ア。ア。仁。徳。天。皇。御。开。

子。供。も。物。い。され。ふ。と。め。

と。御。治。ア。ア。仁。徳。天。皇。御。开。

右一首右中兵大伴宿
祐家持作。是と葉
童蒙袖中持八重
清林皆家持哥子
或說志賀寺上人京極
清喜也。す。ゆ。と。も
上人詠古哥子の由法
お。よ。う。あ。え。の。ね。ば。集

後人。お。と。ゆ。や。玉。帝。ア。ハ。玉。帝。ア。ハ。玉。帝。ア。ハ。

思。ふ。玉。帝。ア。ハ。思。ふ。蠶。餌。ア。ハ。思。ふ。蠶。餌。ア。ハ。

臣奉勅宣諸王卿等
隨堪任意作歌并賦
詩仍應詔旨各陳心
緒作歌賦詩
始春乃波都祐乃

新古今和歌集卷第七

物語の子日れ小松ノ一帰をゆひて

ナ

さすとつり思本童蒙粉紫白野別毛は廻を用ひて又かひをともく帰る

常内帰とつぶぬとやしるとひとびと帰とすや年のかよふ帰るに

うるがる金とのよがまこと本波と

タ

ねひきあめの

トテシ野とと子首の社

ひよに一とて野のなみ

乃あああああれいそ

三五と少くあひたる

スとソ侵すきを

きすう代のうのねど

毛り年輪のねと龍

白砂乃ねよとてか

くとあい毛乞とお

今村の海の海の高

亭子院乃

すす津を、屏風よわ葉

紀貫之

きすう代のうのねと白砂とおうの

えよよやうとと一れりあひく

子日とよやむ

若原清じは根也

森子

ねひきあめのあらはの野のうじめ小松

ひくとやちよれども

紀貫之

きすう代のうのねと白砂とおうの

えよよやうとと一れりあひく

亭子院乃

すす津を、屏風よわ葉

初とがう山へあらふ
ひのとねせん
わらみのうの野とつのうとあらへ
よひのうととよ
よひのうととよ

延喜清時屏風詩

思本貴之集第西云天
慶三年同七月在蜀

舊教屏風のねう十五

首の内才育性賢ホ

考之集三山あらるハ

河ひまの山のうのうとばくととねのうとおうとくりはま
去ぬとらうとばく集うハ延喜乃月と乃思本ハ異本哉(きんねきの
心)と彼月は内屏風のうとナ月の山をとおるととくと本錦絽
ハ神事小がすぬれハ五年をうけてこさんと(是)月のひとアソ
花と山あゆのうとハ神事のおハ山藍(アソ)マササギ擇るも擇

こゝのをまよひと
まき乃か年うけと

わうねりと後波疾

あうア

君代よ何の事

様乃くもいひるど

いは姫宮のむ事世

よ行ひきともに

又はぐれいりくと

すのひの傍のまき

伊勢家集云そ小向

后宮乃ぞれは室の

中りあせかうの所

かうよの所、よろ

と何去行りセ奈古ふ

十萬乃ゆゑと哥乃

かくもゆゑとれとつるん

かくもゆゑとれとつるん

佐江内侯よ舊しきり

と何去行りセ奈古ふ

十萬乃ゆゑと哥乃

かくもゆゑとれとつるん

おちくじと

行恒

後朱雀院皇女之宮とす

行子内親王家

出津門右大臣侍房

君代よ何の事

ちくじの向くと

温子寛平后昭宣天女

七奈古宮みナツ屏風

伊勢^{ト奈古}家

すナ乃江代宮乃あがとよひづ

久一也行ととひもよりり

延喜御時屏風

秀之

山川乃まくの下より

朗詠谷水洗花汲

下流而得上素者三

十餘家々南陽の郡

縣乃谷乃萬の下

もとのう上素と

ゆる半は標榜焉

ををせくと不老

もとと勝て之意

のうげれあ月の

そも墨本貫之集三

天慶三年同七月

門告教屏風のあら

ゆく河去九月而

わりつめにわち

山川乃まくの花

いづかばくたあり月乃まくの花

けほき内林りうてくゑよし

文治六年女侍入内屏風

皇大后宮大支佐威

山人乃まく袖よりふまく内病

前原真風

山川乃まくの下よりいつまれば

あつねまく人内やまとせくらん

延喜清時屏風乃うまよ

景

いづかばくたあり月乃まくの花

けほき内林りうてくゑよし

文治六年女侍入内屏風

皇大后宮大支佐威

山人乃まく袖よりふまく内病

月とひぬ月ハ年と

アリ海乃月ニ足す

はまのゆアホアホ

アホ月とまてこ

やまのゆアホ

野引云經言のまゆ

稀セ本奇ねれく

アホ月とまちり生

也アホ月とま

かす山乃アホ

乃アホ月とまセを我アホ月とま乃アホ

アホ月とまアホ月とま

アホ月とまアホ月とま

アホ月とまアホ月とま

歌

伊勢

真信公密屏風

元浦

山うせはすとすとすとすとすとすと
山うせはすとすとすとすとすとすとすと
振乃子すとすとよめ
お放せ舟入候也
大東園中海王候也
教通云御堂園自五男
寛弘五年正月十八日任
將上東門院乃陞先
手うらぐると奈波也
庄義院内生れを経
ておされはよるます
娘もと詫せりて黄何
乃う子辛小一丁ひす
子く智人生とどり
ヨ王子年り捨遺記

山うせはすとすとすとすとすとすと
トすとすと根もひさすとすと
一茶院皇子侍女上東門院寛弘五年九月廿日限誕
ほ一茶院うすとすとせうすとくの九月
ほきくすとすとあわづらむ也大二茶園白
中將す侍りる時わき人こころいせ
池内舟のせと守候乃ねば
まつとりとくくくくくくくくくく
紫式部

山うせはすとすとすとすとすとすと
山うせはすとすとすとすとすとすと
振乃子すとすとよめ
お放せ舟入候也
大東園中海王候也
教通云御堂園自五男
寛弘五年正月十八日任
將上東門院乃陞先
手うらぐると奈波也
庄義院内生れを経
ておされはよるます
娘もと詫せりて黄何
乃う子辛小一丁ひす
子く智人生とどり
ヨ王子年り捨遺記

山うせはすとすとすとすとすとすと
山うせはすとすとすとすとすとすと
振乃子すとすとよめ
お放せ舟入候也
大東園中海王候也
教通云御堂園自五男
寛弘五年正月十八日任
將上東門院乃陞先
手うらぐると奈波也
庄義院内生れを経
ておされはよるます
娘もと詫せりて黄何
乃う子辛小一丁ひす
子く智人生とどり
ヨ王子年り捨遺記

後光宗元年号

壬午日よりうる
ク多年のねのくえ

えどへいと日

天照大神さればあ
つア龍信乃よ

往のにアカヒヨ

心に物アレやねの松

あひ年限量心

どうのりをねの尾

萬代を待てうき

まをとまといす

めくとくね

さきにまとう

れまよねの尾

上在寺と同祥

は捨遺のお香但

御松のねどみすに

次第當ふをとじ

廣済院母室にか祖

は松遺のお香但

久の時御松乃松を人の手
しめせらるよとゆゆ

太武之位

承保四年内裏子日

白川院年号

天喜四年庄宮乃哥令ハ後乃ア
トナ侍ト前犬納言隆圓

後光宗元年号
壬午日よりうる
ク多年のねのくえ

往乃江乃かひよみね乃松ニテア
モウラシテセ乃役ニシキテル。

嘉川院年号
甲寅
寛治八年閏白前太政大臣吉陽

院哥令ハ後乃ハ心を

虧賛玉母

より御江ノ松乃尾山の位あけテ
かうチセテ、いのとをひとせテ、
かうチセテ、いのとをひとせテ、

後冷泉院おとく

お川ガ

大綱言經信

子日とすとすと乃西
清瀬の國とハ被草乃
草のちのかのねうす
す山内内れま
ましれと

子日とすとすと乃うめれ、こまくと
ちよとひがくわまとやいふ

ねのひとす野(乃

捨中納言通後

年乃はるくま參

ねのひとす野(乃)小松をうづ種て
うづあづくさとすひくと

一書院事承暦二年内裏承食よ役乃を

前中納言通房

野(乃)松と草原
うづ種て承年と
ちくふ君うづと

君り代えノーリとトわくとひく
よす侍り

五十終乃川れあれとせく

月度會みせ乃名乃うす神名御書大田余傳記等は
五道くは辛銓川内川上天照太神宮屋守りうすとふ翁翁第一乃
京廣子くは出す代乃帝子すは清瀬のあすれひすの内乃成
よせ代乃代バヌーとと経ひゆれひあむく
ききこもるね

歌士と
徒人ふる

ね蘿うと乃うと
在ヒ常盤のね
わくと長き乃うと
うと力くと
あう代よあうと
去旨うとると
とまくとれの後
乃うとれの後

人虎すとくアノムトリ

刑アノ羅敷

をも。キララだらく
えき出でよかこゆる
きの箇ひ寺と寺
寺小ぢく寺も到
あらだり寺へとけ

花もしうもんづみくらむ
おあー即時南殿乃うれさうよ
哥よかと仰きとれハ

冬河内侍_{室屋山}家妻
_{室屋山}家妻

生ハ多き言事の花
をもあくべくえ
あらぐれどもし
まつははるかく
いわす御がりと

あやの生アヤノくじ

あやの生アヤノくじ
もの天下を真ま
せきの天乃清酒を
ひけまうと

百首歌をうつて

式子内親王

あやの生アヤノくじ
かかわひちね時代のたまく

井門南宗極西道遺長家
高祖歴_{シテ}御_{シテ}人_{シテ}寺_{シテ}よ
はアリにね有春を_{シテ}りゆうと候
仰

持後太政官

アシテ_{シテ}もあらざりのれ_{シテ}よ
限_{シテ}ねあはば代
ささん序多き也
アシテ_{シテ}あるが
万葉あらぐものか
もあらざりのくはく絲
乃き_{シテ}く_{シテ}範_{シテ}無_{シテ}の
のこのね_{シテ}みるわ

百首歌をうつて

アシテ_{シテ}や庵_{シテ}と鷦_{シテ}根_{シテ}神_{シテ}代_{シテ}
かの_{シテ}く_{シテ}やめ_{シテ}がの_{シテ}とく

千五百首合

寺一のやかたと
あら大_{シテ}根_{シテ}皆

やまくわくをもくのせれぬわよ

日本のまことの

やまとおはすの度

うらやま重視する

ま作りは源根と因

りて神代よ送君

すまむみほ君の所

ひきあひるやを

むかひわをむすの

野引きぬれくかすとい

の病氣おどさんく方引りがくふく事

乃寺とい拂り一乞くあさつてのいづかハ太神宮乃處の

御事とわと山乃萬代病乃寺に前りうすと我ハ

墨東

ヨウシキおはねくわす拂氣と學年年少の神明の威光普世ノ如く人と

馬鹿代に無事の門へ天乃戸のえ乃門へ月日ことよりにうきり

もくの御代されハよせよ小モードハ

りかうき自れヒ戸内福

わたりとすまむしの里と
我なまこいわきと我の

乃風俗されい我なまこ

徳の力古金席の樂

吾道之再昌と学年

を用ひすまく

位光明神の和琴とち

らせきうちの我なま

高院と和琴と歌ひ

せすすす成すねは定め

てはちとすまむしの歌を

少りて天をすまむ

きくらまくと

まむとねと葉

千五百萬年合

益原宣家明

わたりとすまむしの里とち
よしむしのゆつきすまく一乃門

八月十五夜和琴不年合す月も

秋夜とすまくと

あをゆすよハ枯乃木

ナカ記録所用園其所之奉行也

和すお乃用園アキテ

玄旨松樹千年 モハクミ

開闢

とつてねども事と限
とすと月が詠む

カタマリノ日暮竹

源寧長

おひれいとせのる
おひれいとせのる

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

おひれいとせのる
おひれいとせのる

わうらうとあす
わうらうとあす

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

建久七年入道前國白太政大臣室原
吉門院守房年号

てへこゝ尋よすをけん

わあふととあとと
わあふととあとと

屋根の縮よも縮
屋根の縮よも縮

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

和寄下のぞ
和寄下のぞ

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

被ふやかへ被
被ふやかへ被

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

きのへな形のうの
きのへな形のうの

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

袖拂ひ拂きとかへ袖
袖拂ひ拂きとかへ袖

お大納言陰房

あさのい

としはく一月り代乃
としはく一月り代乃

袖拂ひ拂きとかへ袖
袖拂ひ拂きとかへ袖

リリリ

リリリ

藤原清輔朝臣

清成

お成れどり五とお

百骨哥よけけくわ

後徳大寺左大臣

とばくまきせさ
れどくは流の始まり
と向ふは年へる若

やよゆくは乃すとこととあり代乃
うては景ドと程
付くもあく本音ハ カナリとくらんおまくいきよめり

司する室宿の橋

あれをうとむとひやりとくらへぬまハ

あくまうりうり子の七十萬石うゆうといひけくこはの候ねされ
とくまうりうりもんともかく七十萬石うりうりてそくされとれむせあ
らうりうりへのうち乃歎をむゆうかと詔すまきこは候ね候は
やをうりうり済の未だ檢遣八百日ゆく度内あむと我兵とひままでわ
おまくいきまうむは難をとくらむひとをもじ候のがとおりす母の歌
よどれとく沖はぬる
ハ沖乃海をちる人

家アリ寄合あはれくまうり春の報の

四二二

かずりやま郡の南

かをとくに福久。持政太政大臣

自復舟城おも若役
は南家山家ああマ

閑院のたとえ嗣の所

かずりやまゆやこ乃すもあらうとふ
かずりやまゆやこ乃すもあらうとふ

かんやのねもとと神社よりはれは家業アーハヤムと御事
あくまうりうりおひよととぞまうやがくうぢやがくうぢやがくうぢやがくうぢ
番目山に於の南うりあひづれりや乃者もととへ野山の現と和
舟の唐詩のまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
持政殿の家山くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
とくらくよめりみ真湯の南家堂——モウリツモウリツ

大嘗會 義基

大嘗會 義基 慶範

中山

信人ふか

天慶時大嘗會主基仲守

御相傳の一用よあ拾遺

とあるてあるゆるひ乃中ひよ

集ちおこお道く

みどせとすれんちゆきつわく

とあいのまゆの年

三重虎年

大嘗會悠紀方風俗年

老仙中ひらりく常

聖かくま年を行松

の風俗年

風俗年おこ集お道く

おうねこすお日乃黒代いげ草

ありねとすおれれれ

ことみのけりやわせ

お首云お日乃や

乃赤れれれ花道は諸多とせりスヒヤモお日のよしのとせこいへ

首とく神系内附神人ノミナにすれ墨案日本紀下天細女命以羅
萬手繩ミタヌチとありとわて神事小用の事と今り白事とあすとて神祇友

うと冠乃高タコレゆふねととひととすり二重大岡乃年中約事
要合注ヨウツウ明アハラセキ年命とすとと年の縁を詔すせりとて是處天子之御行
医ヨシの故ヨクノ序シキととむつてとまこととまこと九クシれあつととへ

長和五年大嘗會悠紀方風俗年

近に圓相日卿ミツマサを補祝

令れ名をくすがゆアシナガハシナガハシすとる細ひ亡ムカシの年会よせうねくシテはく

墨案六百萬年会元日宴乃五萬於昭哥アシナガハシ方陣云アシナガハシの年會を

裏奉アシナガハシとくわくと

アシナガハシとくわくと

皇帝アシナガハシと掌アシナガハシむぢ

ちうとをひくと

山程閣アシナガハシ後神アシナガハシとよ

神アシナガハシとよあくと頼アシナガハシと

穿アシナガハシのうとめで頼アシナガハシと

坐アシナガハシとすと神事アシナガハシと

かきりくわあうのと

乃じと人アシナガハシと

山アシナガハシとせよとせれ

とくわくとくわくと

とくわくとくわくと

とくわくとくわくと

山アシナガハシとあくと

寛活二年大嘗會屏アシナガハシ風アシナガハシとくのと

山アシナガハシとよやうとお中納言直房アシナガハシ直房

とくわくとくわくと

とくわくとくわくと

とくわくとくわくと

とくわくとくわくと

由崇茂年

どすと六近江齋

尾山よりいひす

椿八子家とあれの事

是ハヤリモミ不事

くらりあきゆかめの内

そと後とて明王

乃前代よしに知る

辰月參入音聲

大嘗會才二日庚日御殿

乃奈竹里佐野音聲

と紫苑ちく悠紀夏基

乃燈と立時刻る常

燈と内膳竹膳と

供一ト二獻のうち四

司風俗と美と儀齋

内大臣宣太史信成

音聲人次尋母タガ音

男承人後玉行り皆

うひて來へる哥

と未音聲と云詠筆考勅使悠紀方乃奉大御

參乃燈と内膳竹膳と供と二獻のうち膳の凡

俗と美とそり儀齋門下り且うひて美と之奉方矣全盡と云

大御山にての生郎、舟波カマクラの生郎舟波の名すらされ

る所の代すの河口に立木と王道と立ちせむが乃序章は清

徳春昇 大嘗會にさへ初緒を詔ふすとまことに御嘗會と云

也代乃立木よとと立木と大嘗會とすアそれにも神使乃福を拂く時

乃舟を船舟哥とすり舟、其舟也或ひ以神不壽ラレ者或ひ以福者

始と成草子八重ねもり行力

ひすのやすのアね 佐野郡と大嘗會乃縄乃圓那とての悠紀方

刑アヘ泥栗

大御山にてのうの野乃ホミヒナ

石河六角義代アヘモリヒリクム

仁安元年 大嘗會悠紀舟

よ

久美二年 大嘗會悠紀舟屏風よ近江
わらとよやる 宮内ミツル永範エイバン文章望垂
文書作成シテスル子

かとよめの内月とく

くとよめの内月とく

かとよめの内月とく

平治元年 大嘗會主墨方唐目參

入をもは野とよやる

お近江を奉方す人丹は或傳中古より那の名を大臣出で神祇
友を育てトリヤマミテモ福とゆに安永年の大嘗じみ憲
紀乃公鄰に近江には田あきらくよ年より御室の内をうりめけにうり
レキシモ王道也此代乃ソウラリナヒセテアラムとの事也

秀永元年 繩
天寶乃年也年
仁安ハ六書也乃
仁安之祖兼也
ハ秀永乃主奉
乃高人のノリ命 神代イリトヨウニヤシヤシツウカス
ガリナリ
神代イリトヨウニヤシヤシツウカス
野列云ヤリツウカス

秀永元年 大嘗會主奉方福壽
哥丹波云長田村ヒヨウル
中他吉賀景
椎中納言氣光

仁安

八木作のいわをソリ縄内母の事ニ愚栗は年ハ日本紀ト天照大神
天邑君ヒササギヒサセキシヘタムクヨリ神代矣上云因定テ天邑君
即以其稻穀始殖于天狹田及長田其秋苗類八握莫莫然甚快也
何リナリカクサリヒサセキナリありとく神代の長田ヨウヘ
稻も秋乃アリ神代ソリカクヒサセキナリ今ナニセ田の村の縄
うれいともヒサセキ後又ハ元暦ノ大嘗會の屏風の事ナリ不富テア
喜相山 宗義陸奥方
近江云義義陸奥累
相山
元暦元年 大嘗會悠紀哥喜
子向名河内守太
嘗會悠紀の子河内
喜相山の子河内
うちれハスーク
あきのひ喜相山乃
相也名河内守

建久九年 大嘗會主奉方屏風
土井院即位年也即年十月大嘗會

乃きねりひのねん

六月 松井

權中納言資實

中納言氣光子

されはされに拂は

こううり算ふ學を基

とまつてもあらね井乃ちをじよすよみれ

六月 松井

肩乃きをうき

志けく。とくすま世からく。とく

てね井の本とよ

りよくよく

とよく。あるね井の常盤うひね井とみおよやかでの背び。ま今
現す。おもむりやうゆうひね井代とひ。ね井と身のまく。あわせたまづ
乃ね。うりよ世乃れのアヤム。こよせのくわゆとつるね井とくま
うづきとじみじアハ納満のゆく。六月のゆく。アハ
作者八重翁の建久懶紀方ともいふせう

